

第6回 感染制御学セミナー 真菌医学研究センターMonthlyセミナー

日時：平成 30年11月7日（水） 18時00分

場所：千葉大学真菌医学研究センター大会議室

The Gut Microbiota and IBD: Moving from Correlation to Causation

Dr. Nobuhiko Kamada

Division of Gastroenterology, Department of Internal Medicine,
The University of Michigan Medical School

要旨

消化管や皮膚のようにヒトの体内・体表には細菌をはじめとする無数の微生物が定着しており、宿主との巧妙な共生関係を構築している。近年の研究により、消化管内の常在細菌（腸内細菌）は宿主免疫系の発達や感染生微生物の定着阻止に重要な役割を果たしている事が明らかになって来た。一方で、炎症性腸疾患などの消化管疾患患者では腸内細菌叢が著しく乱れていることが報告されており、腸内細菌叢の攪乱と病態の関連が強く示唆されている。また、腸内細菌の乱れは消化管疾患だけでなく、肥満やアレルギー、糖尿病、癌、神経性疾患など多様な疾患への関与が報告されており、健康な腸内細菌の維持が多くの疾患の予防になると考えられている。この為、腸内細菌叢の是正を目的とした『腸内細菌編集』技術が新しい疾病予防・治療法をして注目され、実際に米国などでは糞便移植や善玉菌のカクテル製剤を商品とするベンチャー企業が勢力を伸ばしている。しかしながら、腸内細菌叢の乱れがこういった要因で惹起されるのか、乱れた腸内細菌叢は病気の原因なのか結果なのか、もし原因なのであれば、どのように乱れを是正することが出来るのかなど不明なことも多く、更なる研究が必要とされている。我々の研究室では、特に炎症性腸疾患における腸内細菌の乱れと病態への関与に注目している。我々は、無菌動物に患者由来糞便を定着させたノトバイオームマウスを用い、炎症性腸疾患患者における腸内細菌叢の乱れと消化管炎症や各種合併症（消化管感染、線維化、癌）の関連、疾患関連細菌の同定、炎症性腸疾患治療を目的とした腸内細菌編集技術の開発などの研究を行なっている。本講演では、炎症性腸疾患における炎症や合併症と腸内細菌叢の関わりについて、我々の研究室の最新の知見を紹介する。

主催

千葉大学GPリーディング研究育成プログラム

『“超個体”の統合的理解に基づく次世代型「感染制御学」研究推進拠点』

真菌医学研究センター

世話人

真菌医学研究センター・感染免疫 後藤 義幸

連絡先

千葉大学真菌医学研究センター支援係（TEL: 043-226-2495, E-mail: Vab5903@office.chiba-u.jp）